

工夫して、指導していきましょう。

石井康雄（前船橋市立金杉台小学校 校長）

Q

2年生「しきと計算」では、どのような指導をしたらいいのでしょうか？

A

1つ前の単元「図をつかって考えよう（2）」の学習が基礎になります。では、「図をつかって考えよう（2）」と「しきと計算」の違いは何でしょうか？「図をつかって考えよう（2）」では、順に考えるだけでなく、増えたり減ったりした量に着目してそれらをまとめて考える仕方があることを指導するところです。「しきと計算」では、順に考えた式とまとめて考えた式を等号で結び付け、（ ）を使ったときの計算法則として捉え直していきます。つまり、問題の数量に対する見方・考え方を、式に対する見方・考え方へと広げる指導になります。

計算の順序が違って答えが同じになることは「図をつかって考えよう（2）」の指導を通しておさえていますので、「しきと計算」では、そのことを等式で $17 + 6 + 4 = 17 + (6 + 4)$ と表現できることに重点をおきましょう。その際、 $=$ や（ ）の意味と使い方が理解できているかを確認することが大切です。また、（ ）を使うよさはなかなか感得しづらいかもしれませんが、計算が簡単になることを感じさせるとよいでしょう。

P120では、「 $>$ 、 $<$ 、 $=$ 」を使った式表現に取り組みます。なお、ここでの数の大小判断は、10の何個分という相対的な大きさをもとに考えさせることもできます。工夫した見方もできるように配慮するとよいでしょう。

Q

2年生「かけ算（１）」では、どんなことに気を付けて指導したらいいのでしょうか？

A

かけ算の学習では、まず、「同じずつがいくつあるか」という新しい見方・考え方を指導します。そして、かけ算九九を構成し、その習得をはかっていきます。九九を暗記させることは大切なことですが、「１つ分」に着目し、それがいくつあるか、もしくは、その何倍かという見方・考え方は「割合」の概念の基礎になりますので、そのことの重要性も忘れてはいけません。

P3～4の挿絵は、どの子も一度は経験したことがある遊園地の風景です。その時の体験を思い起こさせながら、楽しく学べるように工夫されていますので、形式的な概念指導にならないようにしましょう。P6からは式をつくっていきますが、×の書き順も繰り返し指導してください。かけ算の答えは、「同じずつがいくつあるか」という意味に基づいて累加（たし算を繰り返す）で求めます。この大変さを経験させることで、かけ算九九のよさを教えることができます。P10～11では、「割合」の基礎となる「何ばい」という見方・考え方を指導します。

P12からのかけ算九九の構成は、1年生P69の「10よりおおきいかず」に出てくる、サクランボを「二、四、六、八、十」と2個ずつ数えたり、バナナを「五、十、十五、二十」と5本ずつ数えたりした経験が素地になります。そのため、5の段と2の段が最初に位置づけられています。九九という言い方を教え、一連の指導をおこなってから、九九を覚えさせていきます。九九を覚えさせるには、九九の計算カード、教科書のQRコンテンツや九九の円ばんを使うことをお勧めします。また、九九のカードを教室の出入り口に掲示する、保護者の協力を得て家の中に掲示してもらうなどして、かけ算九九を何度も繰り返し唱える機会を与えるようにするとよいでしょう。九九が示されたら、すぐに答えが言えるよう、上がり九九（通常の九九）、下がり九九（逆向きの九九）やバラ九九（フラッシュカードなどによるバラバラ九九）といった、指導に工夫を入れていきましょう。QRコンテンツや九九の円ばんは、あがり九九とさがり九九の両方に対応できます。

「かけ算（１）」の最後には、P23のだいちくんのふきだしのような感想を拾い上げて「かけ算（２）」へと自然だらかに移行していきます。なお、 $2 \times 3 = 3 \times 2$ のような答えが同じになる計算は、「九九のきまり」で指導することになりますので、この時は深い入りする必要はありません。